

## 「新たな教師の学びの姿」を実現する校内研修の在り方

－ I R S を活用した省察と対話を通して－

企画開発室 檜 垣 賢 一 赤 松 大 輔 藤 内 大 介  
濱 松 清 司 林 大 樹  
【要 約】

本研究は、「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて、教師の「個別最適な学び」とともに「協働的な学び」の充実を図ることができる校内研修を提案するものである。教師の学び（研修観）の転換が図られることを目指し、本センターの研修において、他者との対話を通じた学びの場を多く設定するなど、教師の主体性を高める内容を充実させることとした。1年次に、校内研修に関するアンケート調査を実施し、2年次に、省察と対話を通じた校内研修の支援を実施する。

【キーワード】 新たな教師の学びの姿 研修観の転換 協働的な学び 省察 対話

## 1 研究の目的

令和4年12月19日の中央教育審議会答申「「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～」では、「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて、教職生活を通して「一人一人の教師の個性に即した「個別最適な学び」」や「他者との対話や振り返りの機会を確保した「協働的な学び」」が実現されること等によって教師自身の学び（研修観）の転換を図っていくことが必要であり、そのことは、子どもたちの学び（授業観・学習観）の転換につながっていくと述べられている。

また、本県では、「第3期愛媛県教育振興に関する大綱～愛顔（えがお）あふれる「教育立県えひめ」の実現～」において、七つの振興方針の一つとして、「教職員の働きがいのある魅力的な職場づくり」を掲げ、社会の変化や教育現場の実際のニーズに対応した研修機会の充実が求められる中、本センターにおいても新たな研修の在り方について研究を行っている。

一方、2024年度（令和6年度）全国学力・学習状況調査〔学校質問〕における、本県の回答結果集計によると、「児童（生徒）自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を学ぶ校内研修を行っていますか」という設問に対して、「よくしている」と回答した割合は、中学校24.2%（全国比－6.7）、小学校31.1%（全国比－3.0）であった。このように、教師が「新たな教師の学びの姿」を認識し、校内研修において探究的に学ぶ機会が、全国平均と比べて少ない傾向が見られる。

そこで、「I R S（インタラクティブ・リフレクション・シート）」を活用した省察と対話を通して、教師自身の経験を基に探究的に学び合う校内研修を継続的に行えば、教師の学びへの主体性が高まり、新たな知識や技能の獲得にとどまらず、研修観の転換につながるだろうと考え、2年間継続の調査・研究を行うこととした。本年度は、その1年次である。

## 2 研究の内容

## (1) 校内研修の現状に関する情報収集

校内研修に関する国内の動向や課題について、中央教育審議会答申や教職員支援機構（以下「N I T S」という。）の戦略（図1）、他県の先行研究などから情報収集を行った。教職員に対する総合的な支援を行う全国的な拠点であり、教職員の資質・能力の向上に寄与することをミッションとして掲げるN I T Sの戦略では、子どもの学びにおける学習観の転換を図るキーワードとして、



図1 N I T S 戦略

「子どもを主語にした学校教育」「生きて働く知識・技能の習得等」「個別最適な学び」「協働的な学び」が提示されている。加えて、教師の学びにおいても、研修観の転換として「教師の主体性の尊重」「現場の経験」を重視した学び「個別最適な学び」「協働的な学び」が示されている。さらに、子どもと教師の学びは相似形であるとし、教師の学びの姿から子どもが学び、その学びが相互に往還していく必要性が述べられている。また、石井（2020）は、「授業改革をめざすなら、めざす学びのプロセス（協働することや思考が深まること）のイメージを、教師たち自身が自らの学びにおいて追求し自分の身体をくぐらせて理解しておくことが重要です。（中略）自分たちが子どもたちの学びのモデルとなっているかどうかを問い、子どもたちに経験させたい学びを教師たち自身が経験するような、教師の学びの変革も同時に追求される必要があります。」と、授業改善を進めていく上で、新たな教師の学びの在り方を教師自身が経験することとともに、学びの先達としてロールモデルの役割を果たすことの重要性を述べている。

## (2) アンケートの作成及び実施

収集した情報を基に、調査内容や回答方法等を検討し、アンケートを作成した。なお、詳細な質問項目の検討に当たっては、長野県総合教育センター調査研究報告を参考にした。

### ア 対象者

対象者は、愛媛県内全ての公立小・中学校と県立学校の、校内研修計画の立案等に主に携わる教員（研修主任等）である。

### イ 調査内容

調査内容及び質問数を、表1に示す。

表1 調査内容及び質問数

調査内容	質問数
基本情報（学校名、担当校務、経験年数）	3問
校内研修の実施状況（回数、担当者、内容）	4問
校内研修における課題（機会の確保、内容、実施形態など）	4問
校内研修における工夫（実施時間、ICTの活用、省察、対話など）	2問
今後の校内研修における工夫（実施時間、ICTの活用、省察、対話など）	2問
県総合教育センターへの要望	1問
計	16問

### ウ 調査期間及び回答方法

令和7年9月29日～10月31日の期間に実施し、Microsoft Formsで回答を求めた。

## (3) 結果及び考察

### ア 回答者数及び回収率

回答者数及び回収率を、表2に示す。

表2 回答者数及び回収率

校種	回答者数	回収率
小	260名	95.6%
中	117名	92.1%
県立	70名	89.7%

### イ アンケート結果及び考察

#### (7) 校内研修の実施状況

##### a 校内研修の実施回数

校種別の回答結果を、表3に示す。

表3 校内研修の実施回数

校種	回数
小	21.4回
中	10.5回
県立	12.7回

##### b 校内研修で実施している内容

校種別の回答結果を、図2に示す。校内研修の内容は多岐にわたっており、小・中学校においては、「授業改善（学力向上を含む）に関する内容」が最も多く、県立学校においては、「人権意識を高めるための内容」が最も多い。また、共通して多い項目としては、「ICT活用能力の向上のための内容」が挙げられる。一方で、「研修観（授業観）の転換に関する内容」については、いずれの校種においても取り上げるこ

とが少ない傾向が見られ、「研修観（授業観）の転換」の重要性に対する認知が十分に浸透していない状況がうかがえる。

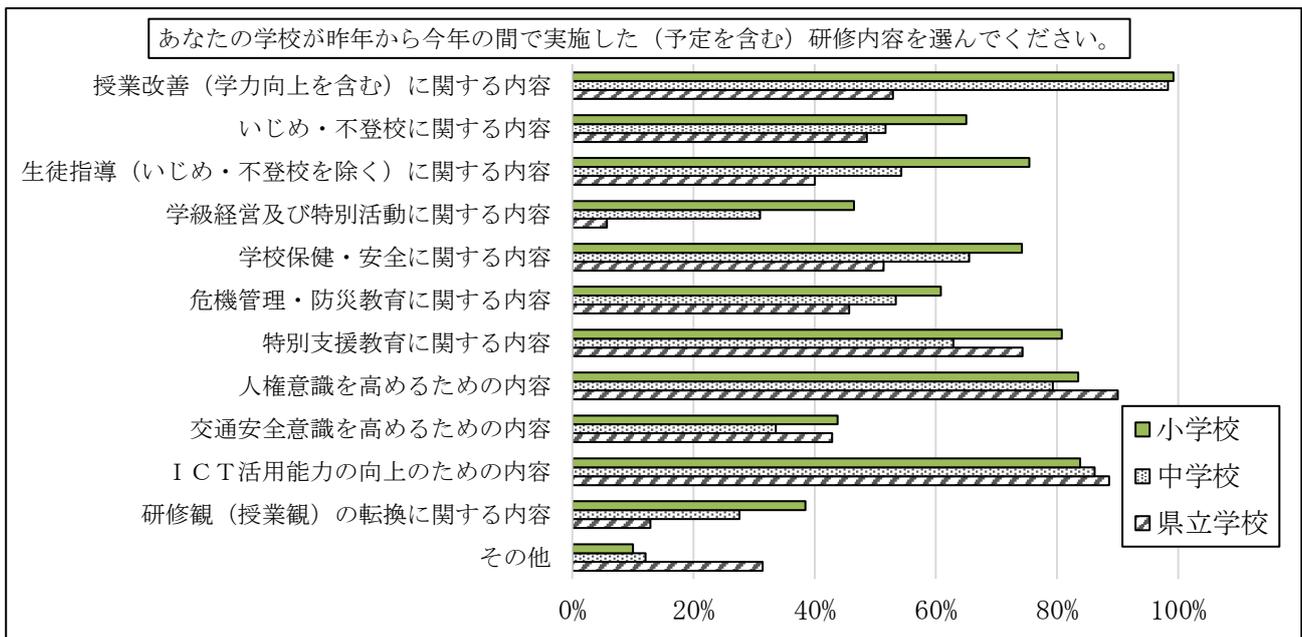


図2 校内研修で実施している内容

(イ) 校内研修における課題

a 校内研修における課題認識

回答結果を、図3に示す。校内研修における課題認識について、64%の学校が「とても課題を感じている」「やや課題を感じている」という回答であり、課題認識が高いことが分かる。

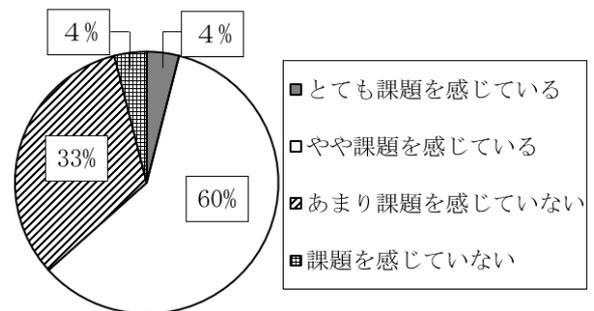


図3 校内研修における課題認識

b 校内研修における課題の内容

校種別の回答結果を、図4に示す。校内研修を行うことが日々の授業改善等に役立つとは感じているものの、「ニーズに応じた研修内容になっていない」「教職員の研修参加への意欲が低い」「省察や対話の機会が少ない」等の項目が多く、課題は多岐に渡っている。共通して最も多い項目は「研修時間の確保が難しい」である。

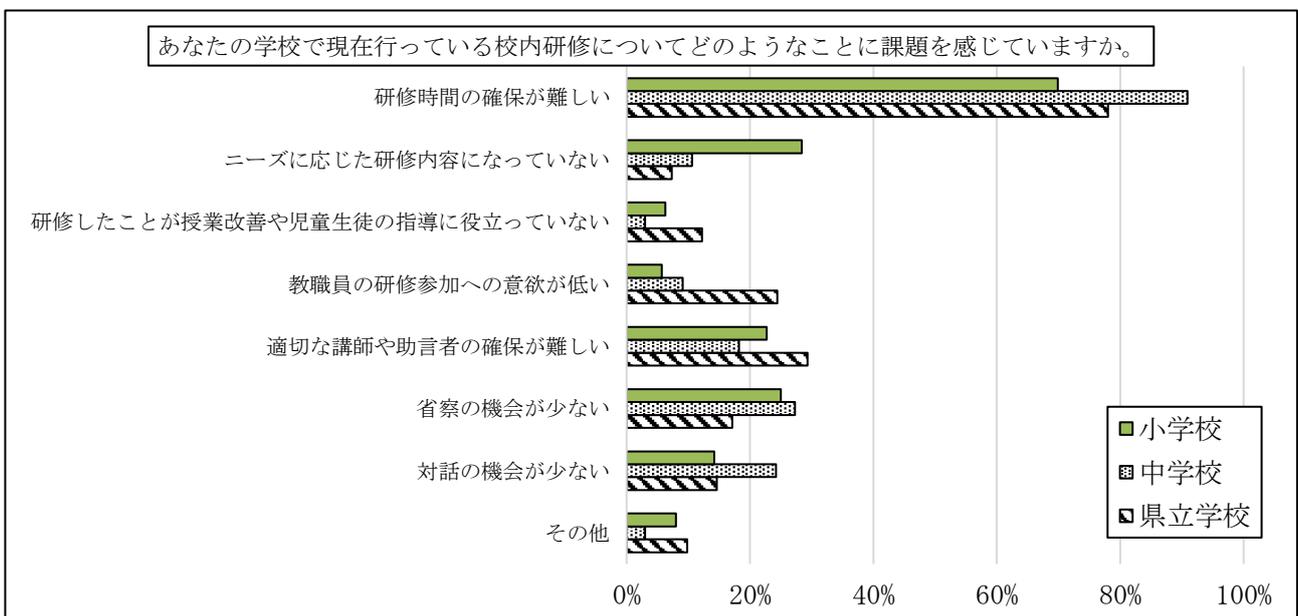


図4 校内研修における課題の内容

## (ウ) 校内研修における工夫

### a 校内研修における現在の工夫

校種別の回答結果を、図5に示す。共通して多い項目としては、「短時間の研修を取り入れるなどの実施時間の工夫」が挙げられる。また、「対話を通じて教員同士で学び合う機会を設ける」が比較的多く、短時間でありながらも対話を取り入れた研修が実施され、従来の伝達型の研修から対話型の研修への転換が進んでいる。一方で、「省察を通じて教員同士で学び合う機会を設ける」「教師自身が課題を設定し追究する探究的な学びを取り入れる」「研修後に振り返りや評価を行い学びを深める」の三つの項目については、いずれの校種においても低い傾向が見られた。省察や探究的な学びの機会については、時間の確保が必要であり、時間の制約がある中で、研修観の転換に向けて、研修をデザインし直す必要がある。

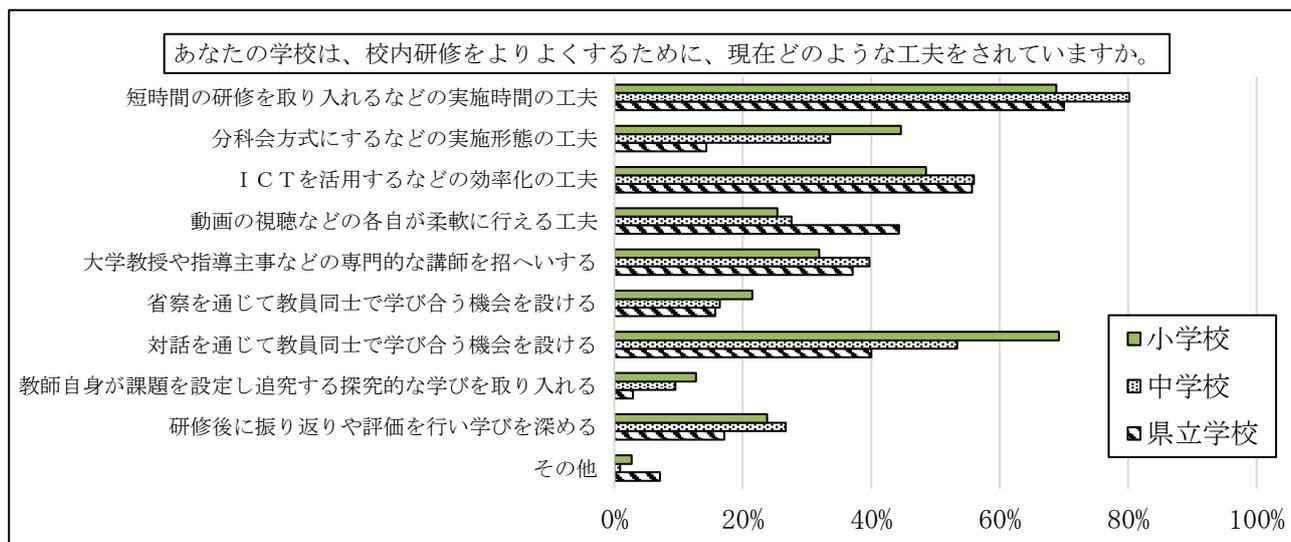


図5 校内研修における現在の工夫

### b 校内研修における今後の工夫

校種別の回答結果を、図6に示す。共通して多い項目としては、「短時間の研修を取り入れるなどの実施時間の工夫」が挙げられる。図5と比較してみると「省察を通じて教員同士で学び合う機会を設ける」「教師自身が課題を設定し追究する探究的な学びを取り入れる」「研修後に振り返りや評価を行い学びを深める」の三項目については、いずれの校種においても多い傾向が見られた。省察や探究的な学びについて、前向きに取り組もうとする姿勢が見られる。

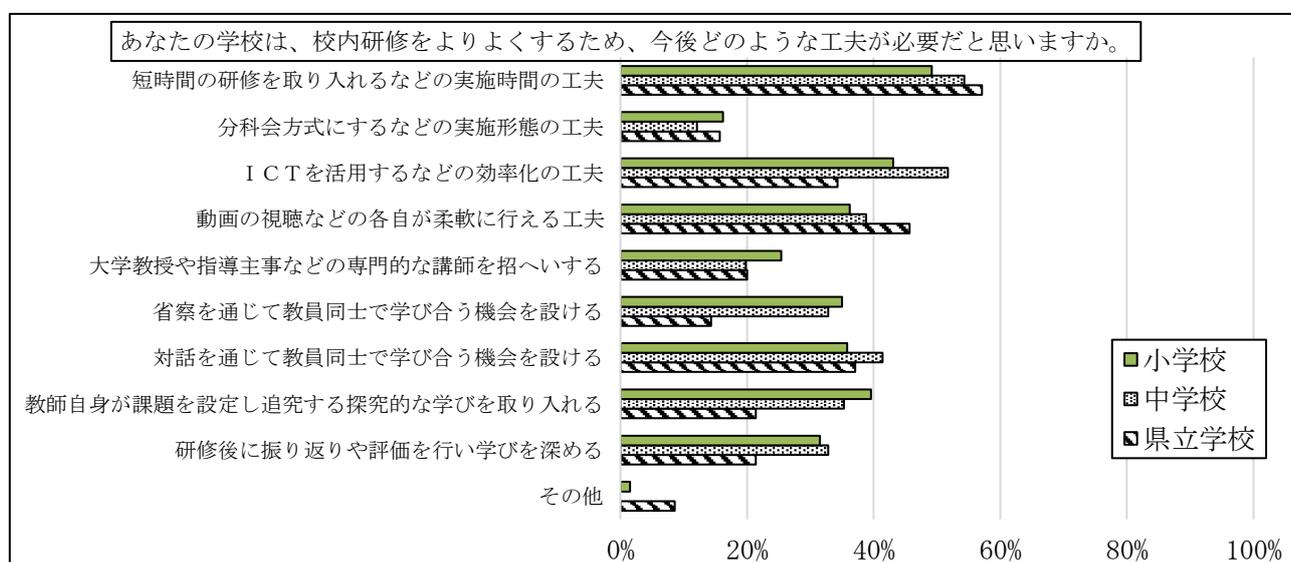


図6 校内研修における今後の工夫

(4) 「新たな教師の学びの姿」を実現する研修の実践

ア 基礎研修における実践

(7) 「CoCo Card」の開発

アンケート調査により、今後も短時間の研修が増加する傾向がうかがえる一方で、探究型の研修の重要性にも意識が向き始めていることが分かった。しかし、探究型の研修を短時間で行うことは難しい。そこで、探究型の研修をデザインする第一歩として、研修に省察を取り入れ、対話によって教師自身の価値観を言語化し、一人一人の課題を明らかにすることによって、教師の主体性を高めることができると考えた。他者との対話を通じて客観的・多角的に振り返り、新たな気付きや学びを得る対話型リフレクション研修において使用することを念頭に、研修参加者が、互いの価値観（自分らしさ）を共有することができるカード「CoCo Card」を開発した（図7）。カードには、一枚につき一つの価値観が書かれており、参加者は自分の価値観に近いカードを取捨選択することで、楽しみながら相互理解を深めることができる。



図7 「CoCo Card」

(4) 研修の実施状況

教員経験10年目の教員を対象とするキャリアアップ研修Ⅱの共通研修において、カードを使用した対話型リフレクション研修を実施した（図8）。「ミドルリーダーとしての在り方」というテーマにおいて、参加者はカードを使用し発話することで自分の価値観を再確認し、対話を通して相手から情報を得ることで、自分の価値観を更新することができた。また、対話の中で自然と今までの教員生活の振り返りが行われるとともに、今後の指導方針を明確にイメージすることができた。



図8 基礎研修の様子

イ 課題別研修における実践

(7) 「IRS」の開発

多くの研修において、新たな気付きを得ることはできているが、その気付きが概念化され、教育現場での実践で生かされなければ意味がない。そこで、対話型リフレクション研修において、参加者が、研修で得た気付きを見える化し、今後につなげることができるシートを開発した（図9）。「IRS」と名付けたシートには、参加する研修への思いや願いを事前に書いておく欄や対話で得た気付きを記録する欄、整理できていない疑問等を書く欄を設定した。また、研修で得た気付きを概念化する欄を設けておくことで、今後につなげることができると考えた。

図9 「IRS」

(4) 研修での使用

研修主任を対象とする希望研修において、「IRS」を使用した対話型リフレクション研修を実施した（図10）。机をT字に配置することで、参加者が互いの表情を見ながら発言できるよう環境を整えた。また、一人一人に端末を用意し、学習支援アプリを活用して参加者の意見を相互に共有できるように研修をデザインした。研修開始時の「IRS」を活用した対話の場面において、参加者は自校の取組と校内研修の現状を明らかにしながら、省察することができた。参加者は「IRS」を活用



図10 課題別研修の様子

しながら発言することで、新たな教師の学びについて再考することができた。また、研修の最後に行った振り返りの場面では、今後自校で取り組む校内研修の方向性や具体策について、意見交換することができた。

### 3 研究のまとめと今後の課題

#### (1) 研究のまとめ

本年度は、アンケート調査を実施し、校内研修に関するニーズや課題を明らかにした。校内研修を計画・実施する上で、各校にはそれぞれの悩みがある。特に、勤務時間内の限られた中で、研修時間の確保に苦慮している状況であることが分かった。また、時間に制約のある中で、校内研修において、省察や探究的な学びの機会を取り入れたいというニーズも確認することができた。省察や探究的な学びの機会を校内研修に取り入れ、「協働的な学び」を契機として、教師の学び（研修観）の転換と授業改善を進め、児童生徒の学びの変容につなげることが、「新たな教師の学びの姿」を実現する上で重要である。

#### (2) 今後の課題

今後の課題として、「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて、アンケート調査の結果を基に、省察と対話を中心とした校内研修をデザインする必要がある。また、次年度は研究協力校を選定し、協力校における校内研修を複数回実施していただくことを計画している。教師の探究的な学びにつなげるために、協力量校と連携し、省察と対話を通じた校内研修を実施したい。その際、本年度使用した「CoCo Card」や「I R S」をブラッシュアップしたものを、校内研修で活用していきたい。また、研究成果をホームページで公開し、校内研修に活用するネットワークができるように計画していく。

#### 主な参考文献

- 中央教育審議会答申「「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～」2022
- 愛媛県教育委員会「愛媛県教育振興に関する大綱（第3期）～愛顔（えがお）あふれる「教育立県えひめ」の実現～」2023
- NITS戦略～新たな学びへ～2025  
[https://www.nits.go.jp/about/strategy/files/index\\_NITSstrategy\\_202504\\_001.pdf](https://www.nits.go.jp/about/strategy/files/index_NITSstrategy_202504_001.pdf)（2026. 1. 16 参照）
- 石井英真『授業づくりの深め方』ミネルヴァ書房2020
- 長野県総合教育センター「「新たな教師の学び」実現に向けた校内研修の充実」2024
- 長野県総合教育センター「対話による学び合いをめざして」2024
- 滋賀県総合教育センター「「新たな教師の学び」の実現に向かう、小・中学校における校内研究のあり方」2023
- 前田康裕『まんがで知る教師の学び これからの学校教育を担うために』さくら社2016
- 熊平美香『リフレクション 自分とチームの成長を加速させる内省の技術』ディスカヴァー・トゥエンティワン2021
- 熊平美香『ダイアログ 価値を生み出す組織に変わる対話の技術』ディスカヴァー・トゥエンティワン2023
- 平田オリザ『わかりあえないことからーコミュニケーション能力とは何か』講談社2012